俺は天使じゃない

狛井菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺は天使じゃない

【Ｎコード】
Ｎ９３８７Ｚ

【作者名】
狛井菜緒

【あらすじ】

クラスメイトの男子から恋愛相談を良く受ける少年、樫江　流は、落ちこぼれと呼ばれるエリスに無理矢理召喚されて召喚獣として、異世界に召喚される。
召喚時に付属したチート能力のせいで天使と勘違いされてしまい、否定する日々を過ごす事になる。
あくまで人間だと出張する少年と、天使と勘違いする人々がおりな

す勘違い系ファンタジー。

※ハーレムはありません。何故か美少女キャラには崇拝されますが、主人公は本気で嫌がってます。友情目線で恋愛は二の次なのでご注意下さい

偽天使の召喚？（前書き）

昔書いてた小説を、転載しました。

誤字脱字があったらすいません

偽天使の召喚？

良く晴れた昼下がり、ボンヤリと購買で買ったパンをムシャムシャと食べながら流（リュウ）は空を見上げる。

（おー…マジいい天気）

「樫江君」

名前を呼ばれて流はゆっくりと振り向くと、クラスの女子が居心地悪そうな顔でこちらを見下ろしていた。

「なに？」

「先生が、早く進路調査書を書けって」

「……んー」

流は机の中から筆記用具を取り出し、しわくちゃになってる進路調査書にノロノロと記入しはじめた。

彼の名前は樫江　流言う（カシエ・リュウ）。ごくごく普通の高校生だ。

髪の毛はぼっさぼさのもろ草食系男子な彼は、非常にめんどくさが

りだった。人付き合いも面倒、考えるのも面倒、動くことすらめんどくさい。

勉強も面倒だが流石にやらないと、母親が怖いから、勉強はやってたが、あとは適当にゆるーい日常を過ごしていたわけだ。

クラスの女子には怠け者として敬遠され、面倒見がいいクラスの男子からはそこそこ面倒見て貰ってる

そんな感じの人間だ。進路調査書を書き終わると、それを目の前の女子に渡して再びムシャムシャとジャムパンをほうばる。

（ジャムマーガリン、実にうます。）

「ゆき、樫江君の調査書回収できたー？」

「うん…まあ、グシャグシャだけどね」

「うわっ…こりゃあひどい。これ先生に提出すんのにアイツさ何考えてるの？」

「何も考えてないんじゃない？いつも無表情で、ボーっとしてるし。」

「ああ、」

…女子の評判は実に頗る悪いのはわかるが、本人の近くで言うなと流は思ったが、反応するのもめんどくさいのでボーとしてると、背中をバンと叩かれた。

「よっ、なに食ってんだ？」

「ジャムマ。」

「はは、お前それ好きだなぁ」

「…田中は小倉マ好きだな。あんこがついてる」

「マジで？どこ？」

「左頬」

指摘してやれば、田中はゴシゴシと左頬を袖で擦るとニカッと笑った。

（…流石野球部。なんか爽やかだ。）

「なぁ、カッシー。聞いてくれよ。」

「…恋愛相談？」

「おう！カッシーに相談すれば十中八九成功するって評判だぜ？」

…クラスの男子が流に好意的なのは実はこれだったりする。
恋愛相談から、先生の愚痴とか、家族の不満とか、フラストレーションが溜まってるらしく流に相談してくる。母親曰く、「あんたは聞き上手だからカウンセラー向きね」と言われた。

なので進路もそちらを希望してたりする。

恋愛相談に至っては、流は聞いてるだけで適当な返事をしてるだけで、なんもしてないのに、相談しにきた奴が、流に相談した後に八割以上告白に成功している。そのせいかついた渾名がカシエル様。

名前がカシエ・リュウだからカシエルらしい。もはやギャグみたいな渾名だ。

そういう訳で流は男子からは何故か恋のキューピッド様扱いをされている。

「…幼馴染み…ね」

「そうなんだよ、俺…アイツの事小さい頃から好きだってアピールしてんのに、全然気づいちゃくれないし、いっそ告白しよかなって…なあ？どう思う？」

「…告白は野球部引退後にしたら？」

その言葉に田中はキョトンと表情を浮かべた。どうやら今すぐ告白に行きたいらしい。

「彼女、野球部マネージャーしてんだろ？…夏期大会が終わるまでは選手とマネジとして接したいから田中のアピールをはぐらかしてるのかもしんない。…部内で選手と恋愛関係になれば他の選手とギクシャクするから、今、告白してもフラれるぞ。」

田中の幼馴染みは、たぶん田中が好きだろうと流は推察した。話を聞けば田中がリトルリーグからずっと試合の応援に来ていて、中学時代からずっと野球部のマネージャーやってると言う。

その上スポーツ推薦で入学した田中の後を追うように、同じ高校に進学してマネージャーしているあたり、脈はあるだろう。

田中と一緒に廊下を歩いてた時に流は偶然に件のマネジに遭遇したが、もろ恋する乙女な視線を田中に向けていたのをみて確信していた。

もしかしたら田中のほうが鈍感なのかもしれない。と

（田中はイケメンだしモテるから、彼女のほうがヤキモキしてるだろうな。マネジ乙。）

「じゃ、じゃあ…今度の夏期大会終わったら告白していいんだな？」

「…気持ちだけ伝えときなよ。俺たち受験生だぜ？お前はすでにＮ大学のスポ薦貰ってて進学決まってるだろ？でも彼女はそうじゃない。もし、ＯＫ貰えてもお付き合いは彼女が進路が決まるまで待て。」

「お…おおお！流石、カシエル様！！」

何故かバシバシと背中を叩かれた。

（…マジで痛い。）

そんな時だった。その声を聞いたのは

――我、三界の民に請う――

「？」

「カッシー？」

――願わくば聖神オルギオスの導きの元に我が造りし道を通り、我が召喚に応えよ――

流は急にぐるぐると何か気持ち悪くなってきた。

お腹を抑えて立ち上がるとフラフラと歩き出す

（なんだこれ）

「…田中、悪い…オレ保健室行くわ…腹が気持ち悪い」

「ジャムマか！？ジャムマにあたったのか！？。」

「おー…悪いけど五限目の先生に適当に言っててくれ」

「大丈夫か？保健室一緒についてくか？」

「いい。近いし」

「気をつけろよー」

田中に見送られて流は教室を出ると、保健室へと向かう。

―来たれ、来たれ―

（五月蝿い　なんだよ…この声は）

―…盟友よ

廊下を歩く足が縺れるのを必死に踏ん張り保健室へと向かう。

―…汝三界の盟約の元―

（階段を降りれば直ぐだ、頑張れ　俺）

―…我が声、

我が心に…

階段を降りようと足を一歩踏み出そうとした時、ドンと誰かに背を押された。

―…応えよ！…―

空中に投げ出された流は、押した奴を見ようと後ろに目をやると、その顔をみて目を見開く

（……俺？）

銀髪に碧眼だが、それは間違いなく自分だった。

背中には何故か羽があり、まるで

天使のような姿をしていた―

「――っ」

その瞬間、強い何かに引き寄せられるように、流の意識はぶつりと音をたてて失った。

＊＊＊

同日

エリス・ガーランドは危機的状況にあった。

クラスメイトのベルツハイドから、交際を強要されていたからだ。

ここ、ルハイム魔法学院は伝統ある魔術師育成の教育機関で、生徒の半分は魔術師系士族で、あとは一般人が占めている。

ベルツハイドは、上級士族で、公爵家直轄の魔術師の一族だ。いわゆるエリートで、高給官僚になる将来有望な青年である。

確かに顔や魔術師としての技量は高いが、女にだらしなく、婚約者

がいるにも関わらず、身分が低い女子にちょっかいをだすため評判は最悪だ。

エリスも容姿がベルツハイド好みの清楚で可憐な容姿をしており、尚且つ【落ちこぼれのエリス】と揶揄されるほどこの学院では地位が低いため、ベルツハイドは遊び女として目をつけたのだろう。

エリスは毎日のように迫られて内心辟易していた。

「…嫌ですよ。何で貴方と交際しなくちゃなんないんですか」

「…俺が後ろ楯になってやればこの学院での待遇は良くなるぞ？使い魔さえ召喚できないお前に、情けをかけてやろうと言う俺の真心に感謝しろ」

ベルツハイドは嫌みったらしく笑うと、自分の肩にのる使い魔のドラゴンの頭を撫でる

流なら間違いなく「ウザッ」と吐き捨ててるだろうが、エリスは健気にもその桜色の唇を噛み、嫌味に耐えた。

「私は、…」

落ちこぼれじゃない。と言いたかったがベルツハイドの前ではそれは言えなかった。

三週間前、召喚術の授業でエリスは使い魔を召喚できなかった。原因はわからないが、それだけで周りはエリスを落ちこぼれの烙印を押した。

エリス自身、精霊魔法や錬金術、治癒魔法に優れており、非常に頑張り屋なので筆記試験も上位なのに、使い魔を召喚できなかっただけで落ちこぼれと言われている。総合評価なら優秀なのだが、この世界…エルドランドの魔術師の主力は「使い魔」であり、使い魔の技量で魔術師の品格が決まる。そのため使い魔を召喚出来ない魔術師は落ちこぼれでしかないのだ。

召喚術の先生はタイミングが悪かったのだろうと慰めてくれたが、あの後エリスは何度も召喚術を試したのにも関わらず使い魔は召喚に応じてくれなかった。

だから使い魔が召喚できないエリスには、ベルツハイドに反論する事はできないのだ。

「…とにかく私は嫌なんです。貴方に気がある子ならたくさん居ますので。他をあたって下さい」

「養父のマドラック師君もさぞ落胆されているだろうな。せっかく引き取った魔力持ちの孤児が、学院で落ちこぼれと呼ばれるとは…」

ニヤニヤと笑うベルツハイドに、エリスは顔を怒りに真っ赤に染めて、ベルツハイドを睨み付ける。

「お父さんの名前を出さないで！貴方みたいな最低な人間にお父さんの何がわかると言うの！」

マドラック・ガーランドは孤児だったエリスを育ててくれた王宮魔術師だ。

エリスが魔力持ちだから養女に迎えたわけじゃない。亡き親友の忘れ形見のエリスを、引き取ってくれたのだ。心から自分を慈しんでくれる養父の名前を出されてエリスは思わずカッとなりそう言えば、ヘラヘラしていたベルツハイドは、不愉快そうに眉をしかめた。

「俺が最低だと…？」

「確かに貴方は力量も容姿も、家柄も、使い魔も凄いわ。でも、人間としては最低よ！立場を振りかざして、女を口説こうという浅ましい男に、魅力のかけらも感じないわ。あんたにホイホイ引っかかる女は所詮、あんたの上っ面しか見ていない尻軽よ！こんなのが、シュレイン家の跡取りだと、ご当主様もさぞ嘆いていられるでしょうね！」

「…っ言わせて置けば…！」

そう言うと、ベルツハイドは手につけていた白手袋を片方脱ぎ、エリスに叩きつけた。

「きゃっ」

「決闘だ！エリス・ガーランド！！もし、お前が俺に勝ったら俺は裸一貫で学院中を走ってやる！もし、お前が負けたら、俺に奉仕しろ。一生他の男の前に出れない身体にしてやる。」

「なっ…！」

（なんて破廉恥な！！これがシュレイン家の跡取りが言う言葉！？）

これには周りで聴いていた生徒達もベルツハイドに非難するような視線を向けた。

特に女子。ベルツハイドに熱をあげていた女子の数名すらも、夢ら覚めたように冷たい目線をベルツハイドに向けている。

男子は男子でエリスが負けるのを見越しているのか、「あーあ、エリス可哀想…」と残念そうな声をあげて、憐れむようにエリスに視線を向けている

若干何名かはいやらしい視線を向けてニヤニヤしていたが、エリスは無視した。

「…わ、わかったわ。受けてたつわ！」

震える声でそう言えば、ベルツハイドは計算通りと言った表情で笑うと、「今日の放課後、４時に第一魔法訓練場にこいよ」と言ってエリスの前を後にした。

エリスは震える足を叱咤して、決闘許可書を貰うため職員室へと向かった。

学院内の決闘行為は、決闘を申し込まれたほうが申請書を出さねばならない。

そして提出した教師が審判の元に決闘を行う。…血気盛んな学生のガス抜きするための処置ともいえるルールとも言える。

エリスは職員室でクラス担任に決闘申請書を提出すると全力でやめろと、止められたがエリスは頑として固辞した。

エリスもこうなったからには後には退けない。尊敬する養父を貶めるような事を言ったベルツハイドがどうしても許せなかったのだ。

教師から許可書を貰うと、エリスは図書館へと向かう。

ベルツハイドの使い魔はリントヴルムと呼ばれる飛竜だ。
負けるにしろせめて一矢報いたいエリスは、この後の授業をすべてサボって、術札を作ることにしたのだ。

術札は、魔方陣を書き込み魔力を注ぎこめば起動する簡単な魔法アイテムで、詠唱いらずに魔法を起動できる。

火属性と風属性を併せ持つ竜族の上位種のリントヴルムに、エリスが勝つためには水属性と土属性の術札を大量に作らねばならない。

威力は低いが、連続して繰り出させばの流石のリントヴルムも、苦戦するだろう。
あとは手持ちのマジックアイテムを総動員しないと、勝ち目はない。

エリスは腕捲りすると、早速術札の制作に取りかかった。

そして放課後。

エリスは結局あの後、２５０枚の水術札と１５０枚の地術札を作り上げた。

僅か三時間で４００枚の術札を創るなんて、普通ならできないが、エリスはやりきった。

エリスの手持ちのカードは、養父からもらった護符の剣と魔力回復剤、あとは先生から前から渡されていた召喚術の魔法陣を描いた術札しかない。

決闘会場の第一魔法訓練場にはエリスとベルツハイドの決闘を聞き付けた生徒たちが観覧しにきており、ベルツハイドも己の立ち位置についていた。

ベルツハイドの後方には縮小化の魔法をかけられていたリントヴルムが、元の大きさでエリスを睨みすえている。

うめき声すら恐ろしいドラゴンに、エリスは気圧されながらも、何とか後退するのをこらえ、こちらもキッと睨み付ける。

「ではこれよりエリス・ガーランドとベルツハイド・シュレインの決闘を開始する。各々、正々堂々と戦う事を誓いますか？」

「違います。」

「誓おう。」

二人の誓いに頷くと、審判の教師はコインを手にして上空に思いっきりそれを投げる。

それに応じるように、教師の傍らにいた使い魔の金獅子が咆哮した。

すると観覧席を守るように結界が敷かれ、審判の教師自身も黄色い光の膜に包まれる。

魔術師と使い魔による融合結界といわれる技で教師クラスが扱える、上級魔術だ。

教師の投げたコインは教師の手の甲に乗ると、素早く教師はそれを隠した。

「表で」

「裏で」

エリスは表を、ベルツハイドは裏を選択する。

これにより先攻後攻が決まる

「殺傷行為、並びに禁術の使用行為は反則とし、即時に停学・退学処分となります。それを心得、互いに至力を尽くし戦いなさい。

それでは、先攻はベルツハイドから」

手の甲を開くとコインの裏面があり、エリスは思わず舌打ちした。

「先攻は俺だな。リント、お前の実力をあの小生意気な女に見せつけてやれ」

「がう！」

戦う気満々なリントヴルムは、上空へ飛ぶと旋回して、多きな翼をはためかせる。すると風が集まり、強烈な刃となってエリスに襲いかかった。

「地（アーント）よ！」

１０枚の地術札が集まり、土を形成し盾となり、風の刃を寸断する。

「水（ワータル）よ！ヒュルテ、デヒャルタ！！」

２０枚の水術札を素早く形成し、それに精霊魔法を乗せる

水術札は水の網となり、リントヴルムを襲うが、リントヴルムは火球を放ち、それを蒸発させる。

「ベラド・リタ・ラタタルカ！！」

「っ強化魔法っ…水（ワータル）よ！」

「遅い！」

ベルツハイドが火属性強化の魔法を使うと、リントヴルムの火力が増して、エリスに遅いかかる。

エリスは寸でのところでどうにか水術札で塞いだが、術札を６０枚も使ってしまった。

「う…」

「ふん、小賢しいな。しかし、その術札…いつまで持つのやら？」

「五月蝿い！ララ・テ・サザンシカ！」

光の精霊達の魔力を集めた雷撃を放つと、リントヴルムはそれを軽やかに避けて再び火球を放つ。

そこからは一方的な戦いだった。

エリスが攻撃してもリントヴルムはその機動性で軽く避けてしまい、リントヴルムはベルツハイドの魔法でどんどん強化されていく。

とうとうエリスの術札がきれてしまい、エリスは泣く泣くマドラックから渡された護符の剣をつかい、攻撃を凌いだ。

護符の剣は三回、いかなる攻撃から持ち主を護って、壊れてしまう魔法具だ。

今の攻撃で一回使ってしまったのであと二回はエリスを守る。

「護符に護られたか…しかし、あと二回俺の攻撃に耐えられるのか？」

「っく…」

エリスは、魔力回復剤を飲むとどうするべきか悩んだ。

（嫌だ、このままで終わりたくない！…どうしたら…どうしたら！）

ふと、腰の術札を入れていたホルダーに最後に残っている一枚の術札をみて、目を見開く。

（…これは、召喚術用の…）

「どうした？エリス。もう、降参か？」

ニヤニヤと笑うベルツハイドに、エリスは苦い表情を浮かべると、その術札をホルダーから抜き取った。

（やるしか…ない。）

エリスは全魔力を術札に注ぎこんだ。

「我、三界の民に請う。光の廻廊、幻想の橋、闇の門、いずれかの前に立ちて我が声に耳を貸し給え！」

「ここに来て召喚術？…気でも狂ったか？」

鼻で笑うベルツハイドと観戦していて
クスクスと笑う他の生徒達を無視してエリスは全集中力を召喚呪文にのせる

「――願わくば聖神オルギオスの導きの元に我が造りし道を通り、我が召喚に応えよ。―来たれ、来たれ盟友よ。汝三界の盟約のもと――…我が声、我が心に」

（お願い…！）

「応えよ！！」

（応えて！！）

その瞬間、召喚術の術札がドクリと波打つと、エリスの前に召喚術の魔方陣が展開する。

それを見ていた審判の教師やベルツハイドは驚愕の表情を浮かべる

「…応えて…くれた…私の声が届いたの？」

「そんな…馬鹿な！」

魔方陣は光を増して、天へと抜ける光の柱がたち、やがて光は離散し、中からゆっくりと何かが現れた。

「…人？」

中から現れたのはエリス達と変わらない年代の少年だった。

黒いぼさぼさの髪に、白い半袖のシャツ灰色のベストに黒いズボン、革靴…まるで学生のような姿をしている。

首には真っ白な長いマフラーが巻かれ、風ではためき、その顔立ちが表にでる。

少年は中性的な整った顔立ちで、その表情は人形のように、生気がない。生きているのかどうかも怪しかった

「…？」

少年はゆっくりと瞼をあけると、無機質な緑色の瞳をエリスに向けた。

「っ…」

思わずドキリとするエリス。しかし、彼は直ぐにエリスから視線を外し、リントヴルムに目を向ける

どうやら少年は誰が敵か味方かを確認しているようだった。

人間を召喚するなんて前代未聞だ。エリスは負けを覚悟し、せめて初めて呼べた召喚獣を守るために護符の力をつかった。

偽天使の召喚？（後書き）

次回の主人公のステータスがチートなので注意。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9387z/

俺は天使じゃない

2011年12月29日12時52分発行